

<p>月報</p>	<p>日本キリスト改革派 横浜中央教会</p>	<p>2015年11月15日 11月号</p>
-----------	-----------------------------	-----------------------------

「見える教会」として、横浜中央教会の成長に必要なこと

M. M

昨年11月の月報にも「見える教会とは」と題して寄稿しました。時と場所を超えて「主イエス・キリストの名を呼び求めている全ての人、キリスト・イエスによって聖なる者とされた人々、召されて聖なる者とされた人々」と、「その子供たちから成る集合体」、これが「見える教会」と呼ばれるものです。(コリントI・1-2、ウ大教理問答・問62) 私たちの属する日本キリスト改革派教会も、また、横浜中央教会も「見える教会」の一つです。

ですから、私たち一人一人は主の日ごとに集まり「礼拝」を捧げ、「御言葉」に聴き、「洗礼」と「聖餐式」を守るのです。日本キリスト改革派教会は1946年の創立時の宣言において、「見える教会」に不可欠な3要素として「信仰告白(ウ信条)」と「教会政治(長老政治)」と「善き生活(主日礼拝の重視など)」を掲げました。これらは横浜中央教会の成長にとっても欠かせない柱であり、未来にわたりこれを堅守し、継承していく必要があります。この教会観の源は、生イエス・キリストのご命令である第一の掟、「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。」(マタイ22-37)にあると思っております。教会が成長を続けるためには、教会員がこの掟を守ることを最優先に置く生活を心掛け、これからも、御言葉と説教と聖礼典を重視する「正統的な教会観」を共有し、また継承していくことが大前提とされるでしょう。

ただ、私は、改革派教会にも横浜中央教会にも一つ懸念していることがあります。たしかに、主日礼拝の厳守、あるいは、信条や宣言の重視、長老政治を柱とする教会形成という点でプロテスタント教会でも一目置かれる存在かもしれません。しかし、「見える教会の特権」の一つである「聖徒の交わり」や「キリストによる恵みの提供の享受」(ウ大教理問答・問63)という点ではどうですか? 主イエス・キリストは新しい掟として「互いに愛し合いなさい。」(ヨハネ13-34)とも命じられました。自省を込めていえば、他の教会員や求道者・新来会者のことに気配りが足りない教会になってはいませんか? 教会が成長するにつれて新しい教会員や新世代の会員が増えてくると、これまで通じあっていた言葉や行いが相手に理解してもらえなくなることが多々あります。その場合、長老・執事の役員はもちろん、古くからの会員も相手の言うことによく耳を傾けて先ず聴く必要があるでしょう。共に祈る場を創れるなら、祈りに勝る「交わり」はありません。横浜中央教会の成長には互いに思いやる、そして、相手のために主に祈ることも欠かせない要素であると思っています。

もろびとこぞりて ～主に捧げる高らかなファンファーレ～

I. C

今年もクリスマスが近づいてきました。企画委員会から、計画的な讚美練習をと仰せつかって、「もろびとこぞりて」(112番)と「さやかに星はきらめき」(第二編 219番)の重点練習をすることになりました。後者は有名な“O Holy Night”で、歌詞もわかりやすいのに対して、前者は文語が難しいです。今年、高校で古典を教えるようになり、古文を学び直しているところですので、この機会に歌詞をご一緒に味わいましょう。

1番「諸人こぞりて(挙りて)」は「すべての民が皆揃って」「迎えまつれ(奉れ)」は「お迎え申し上げろ」と、主に対する謙譲語が使われています。「久しく待ちにし主」は、過去を表す助動詞「き」の連体形によって、「長い間待ち望んだ主」となります。「来ませり」は完了を表す助動詞「り」で、イエス様が来られた確実性が強調されます。単なる過去形ではなく、主の来臨が今この時にも大きく影響していることが伝わってきます。英語でも、“He came”だと単なる昔話ですが、“He has come”と現在完了形にしたとたん、過去の一大事件が今なお私たちに関係してくると表せるのと同じです。

2番「悪魔のひとやを うちくだきて」は、悪魔の毒矢が折れるイメージをもっていた私…。しかし実は、あとに続く「とりこ(虜)」が囚われていたところの「牢獄」それをイエスさまが粉碎して下さり、私たちが解放して下さったという意味でした。漢字で「人屋・獄・囚獄」と見れば納得ですね。

讚美歌は、ほかにも「昔いまし 今いまし」が「忌々しい」に聞こえたり(546番)、「たれかは なみする(無みする・蔑する=ないがしろにする・侮る)」(15番)が、ひらがなでは意味がわからなかったりする難しさがあります。

3番「この世の闇路を 照らしたもう (給う)」は、主に対する尊敬語が使われているので、「照らしてくださる」となり、「たえなる (妙なる) 光の主」は「言葉で表せないほどすばらしい 光である主」です。古文ではよく笛の音などの形容で使われますが、「靈妙な」という訳もあるように、靈性を感じさせる美しい言葉です。

4番「しばめる 心の花」は、「しばむことができる (可能)」と読み違えそうですが、また完了の助動詞「り」が登場。受験生は、「さみしい (サ未四已) り」と覚えます。

連体形で「る」と変身していても、前の動詞の語尾がエ段音 (サ変動詞の未然形「せ」か、四段活用の已然形) なら、完了の助動詞「り」だ! と識別できます。もうすっかりしばんでしまい、枯れ果てるばかりになっていた私たちの心の「花を咲かせ」ていただいた喜びを歌い上げましょう。

5番では、これらすべてをひっくるめて「平和の君なる (である) み子を」「救いの主とぞ (強意)」「ほめたたえよ」の繰り返しで締めくくります。

作曲したロウエル・メイスン (米) は独学で音楽を学んだ人で、この曲はヘンデルのメサイアからヒントを得たそうです (讃美歌略解 日本キリスト教団出版局 1955 年)。勢いよくオクターブをすべり降りて飛び立つような出だしから、ファンファーレのよう。毎週礼拝後に 5 分程度ですが、ピアノの周りで練習しています、どうぞ一緒に…!

